
電車で異世界物語

F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車で異世界物語

【Nコード】

N3993T

【作者名】

F

【あらすじ】

アレアレ？電車に乗ったら何故か異世界についてちゃったよ？

作者である私が、当時の記憶が抜け落ちるほどの厨二病を患っていた時に書いた物を一部編集、変更した物語です。

笑ってやってください

序章（前書き）

いきなりですが皆さん。現在、または過去に厨二病になった経験はありますか？

私はあります。

今も厨二病ですが、過去はもっと酷い厨二病患者でした。

実はこの作品、その頃の私が書いた物を使っています。

完結していなかったので途中で物語を変更、付け足していく予定

（未定）ですが、あの頃の気持ちを思い出しながら書いていくのでかなり（精神的に）痛い作品なると思われます。ご注文ください。

序章

〈ある日の夢〉

理由はよく覚えていないが、すべてをにかけて殺し合いをしていた。
斬殺、撲殺、毒殺、刺殺、、、銃火器がないのは幸か不幸か。東西
南北四つにわかれて日々死体の山を作り出す。俺たちはそんな世界
に紛れ込んでしまった。

俺「まさか、、、お前が裏切るとは思わなかったな。竹中。」

竹中「地の利はこちらにある。あきらめろよ。影山」

俺「ハッ!...夢か。何て夢を見ているんだ俺は。あいつに裏切られ
るなんて、有り得ない」

ピピピピ、ピピピピ、

目覚まし時計が鳴る。

今日は夢で裏切られた竹中と日本橋に行く日だ。
馬鹿げた夢は忘れてそろそろ出かけよう。

序章（後書き）

私が、自身の恥ずかしい過去の暴露という精神的自虐に耐えられるならば一週間に1、2回更新していく予定です。

最後になりましたが、誤字脱字話の矛盾などございましたら優しく、
そうオブラートに包むように指摘してやってください。お願いしま
す

いきなり番外（前書き）

まだ1話も始まってないのに番外だなんてと不思議に思われた人。すみません。

実はですね。キャラクターの竹中は実在する友人がモデルなんですよ。

この番外はその友人が二年程前に沈黙の艦隊をみた後、色々な作品にステイブーン・セガールを登場させた物のあらすじを書くということをしまして。

私は誰かに是非ともそれを読んでもらいたいと思いこの番外を作りました。

元ネタがわかれば楽しんでいただけたらと思います。

元ネタがわからない方はごめんなさい。

いきなり番外

【暴走虫の墓】

第二次世界大戦、セガールは家を焼かれ両親も失った。

残ったのは妹のセツ子とドロップ。

ハツカ味のドロップを噛み砕き、セガールの復讐が今、始まる…

【沈黙のレッドクリフ】

孔明「ここはコックク独りにお任せしましょう」

【電車料理人】

ある日、セガールは電車内で酔っ払いに絡まれた美女を助けた。

後日、セガールの家にエルメスのティーカップが送られる。

セガールは本能的カンで危険を察知する！

『これは政府の陰謀だ』

某掲示板を巻き込み、大国の情報員・テロリストと戦いながら明らかになる、ネットの影に隠れた『エルメス』の本当の意味は！？

地球の環境問題をも説いた問題作！このあとすぐ！！

【リトルダンサー】

1984年のイギリス北部の炭坑町を舞台に一人の少年が、当時女性の為のものとされていたバレエに夢中になり性差をこえてプロのバレエ・ダンサーを目指す過程を描いた作品である。

このことは、「僕がバレエ・ダンサーを夢見てはいけなの？」というキャッチコピーからも見て取れる。

周りの反対を押し切ってダンサーを目指す少年は、いつの間にか誰にも負けない戦士へと成長していく。

【DEATH NOTE】

天才高校生 夜神 月が、スティーブン・セガール世界にはびこる犯罪者を裁く為に、ノートに名前を書き入れる。

ノートに書き込まれた犯罪者を自力で追い詰めるサバイバルクライムアクション！！

【バトルロワイヤル】

主演：スティーブン・セガール

42人の中学生、そしてセガール。生き残れるのは一人だけ…

【ウォーターボーイズ】

主演：セガール

男のシンクロ！？と最初は周囲の賛同を得られない中で練習に励み、数々の困難を乗り越えてゆく水泳部の面々。イルカの調教師兼コックをしていたライバック（セガール）は彼らに特訓を強いるなか、徐々に絆を深め秋の文化祭に向け一致団結してゆく。

だが、教育委員会から突然の自粛勧告が！

その裏に潜む国家規模の陰謀に気づいたライバック。そしてそれでもシンクロをやめようとしないう部員達に危機が迫る…！

【AIR】

主演：セガール

さすらいのコック「ライバック」はある町に降り立った。そこで出

会った不思議な少女「観鈴」に飯を奢られ居着くライバツク。
徐々に惹かれあうライバツクと観鈴。しかし千年前の呪いが観鈴を
苦しめた。何もできない自分の無力を嘆く母親の晴子。
翼人に降りかかる災いを相手に、手作り爆発とナイフでライバツク
が挑む！

【機動警察パトレイバー劇場版】

1999年夏。

自衛隊の試作レイバーが突如無人のまま暴走するという事件が発生
する。

しかし、それは相次ぐ事件のほんの幕開けに過ぎなかった！

何者かが仕掛けたコンピュータウイルスによって、都内各所で作
業用レイバーが次々と暴走。

事件解決のメドがたたず焦る特車2課。

しかしまだ彼らは知らなかった。

、
特車2課の御用達食堂である上海亭に勤めるあのコックの存在を、
、

以上

いきなり番外（後書き）

実は私、高校卒業日にこの友人と「俺達、ずっと友達だよな」と言い合いました。（笑）

さて友人よ。

勝手に色々使ったけど、友達だから許してくれるよね？

次は本編をちゃんと進めます。

関係ない話をしてすみませんでした。

1話（前書き）

かなり短いです。

だんだんと長くしていきたいと思っています。

1話

俺「よう、来たな。」

いつものようにJR鶴橋駅で竹中を待つていた。すぐに来た環状線の電車に乗り日本橋へ行くため新今宮に向かう俺達。

いつものように過ぎ去って行く日々だと、いつもの後悔の今日だとそう思っていた。俺はこの時歡喜にふるえた。この腐った日々から逃げられる!と・・・

俺達はいつものように車中でたわいない話をしていた。車中にはサラリーマン風の男、制服を着た高校生だと思われる女子二人、俺達と目的が同じ(日本橋行き)だと思われるパンダナをまいた男が乗っていた。

アナウンス「次は天王寺。てんのうーざ、ザー!。」

俺「ん?なんだ?(?|?)」

女子高生「え?チョットナニ?何か外がもやついてんだけど?」

もやつくってなんだ!?!と思えば外を見ると、辺り一面菜の花、ではなく1メートル先も見えないほど濃い霧に包まれていた。

サラリーマン「他の車両が無くなっているぞ!どうなっているんだ!?!」

連結部を見に行くと、確かに無くなっている。

しかし列車は霧が発生する前と変わらず進んでいる。

俺「・・・まさかオーラロードか?」

パンダナ男「オー○ロードオオ!?」

やっぱりこいつはオタクだ。 人のこと言えない

霧が発生してから十分程過ぎた。

いったいいつまでこの状態が続くのか。サラリーマン風も女子高生風達もパンダナ男も携帯電話かけようとしてたり、持っていたノートパソコンでネットに繋ごうとしたりしている。ちなみにパソコンは意外にもパンダナ男だ。

竹中「影山は何でそんなに落ち着いているんだ? いったい何なんだこれは!？」

俺「落ち着けよ竹中。俺だって多少はパニックっているさ。けど、だからと言って取り乱しても無意味だろうに。泣きさけんでも死人は蘇ることはない。それといっしょさね。それよりも俺は神に感謝したいね。興奮してる。行き先は何処だ? 平行世界か? ファンタズ○ゴリアか?」

パンダナ男「バイストン○エルだと思うなり。」

・・・俺も竹本もサラリーマンも女子高生達も全員がパンダナ男を見ている。たぶん考えていることは同じだ。

(ナ、ナリだつてー!!?)

あと一つ、こいつも俺もダン○インを知っているってことだ。

「ねーちゃん！俺のゲーム板から駒を抜き取っただろ！」

「うるさいわねえ。別にいーじゃないの、どうせゲームの中じゃ神隠しだのなんだので終わるんだから。それになにかとイベントがあった方が面白いに決ってるわよ。」

「勝手にいじらないでよ。滅び行く様子を見ているだからさあ。」

「面白いのそれ」「なかなかね。」「まったく陰気な弟ねえ。」

この二人、言い合いをするも仲のいい普通の姉弟だ。背中の子えた真っ赤な羽根を除けばだが・・・

1話（後書き）

皆さんの言いたいことはわかります。

「パンダナ」

これですよね。

実は私、本文原作を書いていた当時、「バンダナ」のことを「パンダナ」と認識していました。お恥ずかしい。

当時の気持ちを忘れてない為にも以降も「パンダナ」で行かせてもらいます。

2話

俺「えーと、貴方は、、、」

パンダナ「お、お、これは失礼したでござる。拙者のことはパンダナと呼んでもらいたいナリ。」

ござる、拙者、ナリ、、、すげえ！本当にこんなしゃべり方をする人がいたなんて！ちよつと感動。

俺「パ、パンダナさん？あー、ネットは繋がりました？」

パンダナ「駄目ナリ。ケータイも繋がらないでござる。それと敬語は不要。呼び捨てでけっこうでござる。」

妙に漢らしいパンダナ

俺「そうか？じゃあこつちも自己紹介をするか。」

パンダナ「それなら全員でするナリよ。」

パンダナが頼りになるのは気のせいであつて欲しい。

さて、ここで皆のことを紹介していこう。

まずは「俺」こと「影山 星男」十九才男だ。大学生です。よろしく。

次に「竹中」

十九才男。細目のナイスガイ？で高校からの友人だ。

「サラリーマン」こと「金村 太郎」三十才男。少々垂れ気味の目

をした優男。親しみを込めてサラリーマン金〇郎って言ってくれと言われたが、それはやばそうなので却下させて貰った。

「女子高生」その一、十八才女で名は「葛西 未紀」。もやつくと言ったのは彼女だ。今時珍しいツインテールのちよいギャル系女の子。頭が少し残念なのでなんとなく「ツイン」と呼ぶことにした。いやがっていたが決定。

「女子高生」その二、十八才女で名前は「鏡 良美」。俺とパンダナがあだ名をヨ〇シーにしようと思案すると竹中と金村さんに怒られた。

最後に「パンダナ」。紹介するまでも無いと思うが一樣紹介しておく。二十四歳男。本名不明。パンダナ、眼鏡、小太りの男いや漢？だ。

全員の自己紹介がすんだところでようやく電車が止まり霧が晴れていく。

金村「ここは、、、何処でしょうか？」

地面を見る、路線などない。

辺りを見回す、木、木、木、要するに森の中。

空を見上げる、ギャーギャー鳴く視たこともない鳥？例えるなら4本足カラスが飛んでいる。

パンダナ「ふつくくく！まさに異世界！異世界よ！私は帰ってきたー！」

気持ちは分かるがそれは間違いだ！

ツイン「うええええ！？何その頭の上にあるの！）。。(」

ツインの女子とは思えない悲鳴に驚きつつ上を見ると、一瞬何かが見えた。

その時に他の人の頭上にもあることに気付き見てみると、赤と青のバー、そして各人の名前（何故かツインとパンダナはあだ名であった）が表示されていた。

金村「これは…いったい…」

俺「なんだかゲームみたいだな」

鏡「赤は体力で青は精神力ですか」

俺「よく知ってるね」

鏡「弟がやっているのを見たことがあるんで」

竹中「い、意外に落ち着いているんですね鏡さん」

鏡「ツインちゃんの女の子としてどうかな？って思うような悲鳴の方が驚きましたから」

ツイン「ヨッーまでツインって…何気にヒドいこといってるし）
TOT）」

どうやらツインは定着したようだ。

だがツイン。ヨッーは駄目だ。

金村「特に害は無いようですが、、パンダナさん？」

金村さんの問いを聞いた俺達はパンダナを見る。

パンダナは某青狸のごとく自身のカバンをアレでもないコレでもないと言いながらあさっていた。

パンダナ「コレナリ〜！ろ〜ぶれ・わ〜るど1巻」

某青狸の声真似をしながら手に持った本を掲げる。

金村「その本は？」

パンダナ「みんな何も言わずにこの本を読んで欲しいナリ」

そう言いながらカバンからさらに2冊取り出し、俺と竹中、金村さん、鏡さんとツインに1冊ずつ渡す。

ツイン「何で同じ本が3冊もあるのよ）・（）？」

パンダナ「大人の事情でございます」

使用用、保存用、布教用ですね。わかります。

2話（後書き）

ようやく異世界につきました。

次話から冒険が始まる、、、はずですよ。きっと

3話（前書き）

短いです。すみません。

何となく確認してみたら、お気に入り登録が6件ありました。夢じやないよね？

本当に、本当にありがとうございます。

少しでも楽しんでいただけるように頑張らせてもらいます。

3話

…… 2時間後

小説を読み終えた俺達は各自ステータスを確認していた。

俺のステータスは

レベル	4
HP	75
MP	20
STR	30
VIT	37
DEX	24
AGI	28
INT	23
WIS	21
LUK	15

だった。

RPGW(・・)RLD1巻の巻頭にある主要キャラ(イシユラLV5)のステータスと比べてみると、俺の方がレベルが低いのに全体的にステータス値が高い。

これはあくまでも俺の予測ではあるが、まずは性別の違い。

当然女性より男性の方が基本値は高い。

次に年齢

俺は19歳でイシユラは14歳。

10代での1年差ってデカイよね。

最後に俺の個人的なステータス値。

これでもブラックキャットヤマト（ぼかした言い方）で肉体使用的アルバイトやったりしてますから。
ん？その割にイシユラよりレベル低いし、ステータスも大して差がないお前ってどうよ？だとー！

それはおそらく生活の違いに答えがあると思う。

このイシユラというキャラ、普段から狩りを行っていて、小説中にモンスターを倒していた。

まあつまり、一般的な日本人よりレベルやら体力やらは高いよねって話。

……あくまで俺の勝手な予測だが。

他の人にレベルを聞いてみると

竹中はレベル 4

金村さん レベル 6

ツイン レベル 3

鏡さん レベル 3

そしてパンダナ

レベル 14

だった。

何故だろう。理解できない自分と半分納得している自分がある。パンダナ曰わく昔取った杵柄。

二十代のメガネオタにしか見えないんだが……

俺「なるほど。確かにRPG WORLDと同じだ」

竹中「なら、俺達は…この本の世界に？」

金村「いえ、ステータスが確認できるという共通点だけで、そうと決まった訳では」

パンダナ「まあまあ、とりあえずその話は置いて…」

拙者が言いたかったのはレベルやステータス、つまり強さが確認できると言うことは、それが必要になる事態があるのでは？と言うことナリ。

そう、例えばこの本のようにモンスターが存在しているとか…でござる」

舞い降りる沈黙。

竹中や鏡さん、金村さんはモンスターに襲われるところを想像したのか少し顔が青ざめている。

ツインは…何だろあの顔は。オナカヘツタナ。かな？

俺「それで、これからどうします？」

この重たい雰囲気になんて耐えられず質問を投げかけた。

竹中「どう、って、」

パンダナ「これからの行動のことナリね？」

この場から離れ人を探すのか、

それともこの場に残り、電車が元の世界に戻る奇跡を祈りながら待つのか…でござるか」

後者の選択肢の言い方に少し悪意が込められているように感じたの

は俺だけだろうか。

竹中「僕は、元の世界に帰りたいです」

鏡「私も、です。モンスターがいる危険な所かもしれないのに人を探すなんて…」

金村「私も同意見ですね」

ツイン「私も私もー(^o^) /」

竹中、鏡さん、金村さん、そして場の流れに乗るツインが元の世界に帰りたいので電車に留まるべきだといい、俺とパンダナにも半分強要するようにその意志を勧めてくる。

俺はー

パンダナ「拙者は人を探しに、そしてこの世界を冒険するナリ！」

ガバツと立ち上がり両手を広げ宣言するパンダナ。

ほんのりかっこいいと感じてしまった。

パンダナ「影山氏はどうするナリ」

4話

俺はー

俺「俺は人を探しに、この世界を冒険する」

竹中「か、影山。本気か？」

俺「本気だ。考えしろよ竹中。この場所に留まるとしてだ、絶対に帰れるのか？」

竹中「それは…」

俺「それ」

パンダナ「それに帰れるとしても、今日明日で帰れるとは限らないナリ。そうするとその間の食料や水はどうするナリ？それに「ここも絶対に安全とは限らないでござる」

我が意を得たりとばかりにまくし立てるパンダナ。

…俺のセリフ盗られた…

金村「しか」

パンダナ「それに！」

4人の意志を代表するかのよう意見しようとする金村さんと、まだ俺のターンは終わっちゃいないぜとばかりに被せるパンダナ。

パンダナ「それに全員で同じ行動をする必要はないでござる。なんなら拙者と影山氏だけで行けばいいナリ」

この言葉が決め手となったようだ。

結局は全員で人をー安全を確保できる場所を探しに行くことになった。

対立したことによって嫌な空気になったが、ツインの腹の鳴る音と「お腹すいたからお弁当食べていいかな（ノ　Ｔ）」の言葉でそれも吹き飛んだ。

携帯をみると1時を示している。

電車に乗ったのたしか11時過ぎだったかな？

ステータスのフード値を確認すると半分程になっていた。

こんなことになるなら、朝飯をちゃんと食べるべきだったなあと思う吉宗いや星男であった。

（　フード値とは空腹度や疲労度を示すゲージ。時間経過とともに減少していき、減少するほどステータスにペナルティーが科される）

食事の時間が終わった。

鏡さんとツインは学校で食べるつもりで持っていた弁当と水筒に入ったお茶。

男4人は

「こんなこともあるのかと！」とパンダナが取り出したカロリーメイト4本入り2箱とペットボトルのお茶2？を分け合った。

食後の休憩をとって時間確認午後2時。

え？トイレ？

レベルの高いパンダナが周囲を探索し、安全確認した場所軽く穴を掘り、女子 男子の順に済ませましたよ。

さてそろそろ出かけようかと思ったところで

パンダナ「荷物整理するでござるよ」

モンスターと出会って逃げることになった時、荷物が邪魔にならな
いように。

とのこと。

だとするならば…

パンダナ「みんな、まずは携帯電話等の「異文化」を捨てるナリ！」

ツイン「はあ？なんで（？ー？）」

くそっ！俺が言おうとしたことをパンダナにとられた！

パンダナ「なぜ？それは文明の差をできるだけ無くすためナリ。ケ
ータイを知らない人がケータイをみるとケーカイするナリ。

小説を思い出して欲しいナリ。

魔法使いや冒険者が存在する中世ぐらいの文明。

下手にケーカイされたら牢屋行き拷問、最悪殺されるでござるよ」

鏡「確かにそうですね、、、、」

感心したようにうなづく鏡。

ってかこういったシチュエーションってよくゲームやアニメであるからさ、それを参考にしているんだよね。俺もパンダナも。

ヤックデカ　チャー

現在の荷物

俺　リュックサック、無地のタオル。学生組の水筒。拾った手ごろな石。

竹本　60cmほどの木の枝。ステータスを見ると攻撃力1であった。

金村　コンパス（ケータイの附属をもぎとった）。木の枝。

ツイン　化粧品を持ってこようとしていたが、俺とパンダナの連携でもぎ取り、金村さんが説得した。

鏡　ハンカチ

パンダナ　リュックサック、タオル、木の枝。石。アレ。

・・・アレってなんだ？って聞くと時が来るまで秘密って言われた。

竹中や金村さん、学生組の鞆は背負うタイプではなく、肩提げや手提げタイプだったので走る時に邪魔になるのではないかと思いついていくことにした。

準備もできた。

さあ、出かけよう！

4話（後書き）

ようやく旅立ちました。

それにしても短い…

5話

～過去の記憶～

影山 星男

影山 星男

大阪凸凹大学

二回生である。

彼は日々を無駄に生き、思い返しては後悔を繰り返す。それが彼の日常であった。

そんな彼の6歳の誕生日のことだ。学校が終わり帰宅の途中、赤い服の女性に声をかけられた。

何を話していたか。今はもう思い出すことはできない。

ただ唯一覚えていることがある。

それは女性に自分の夢を話したということだ。

「おねーさん。

僕はね、冒険家になりたいんだ。

だって退屈なんだもん。漫画やアニメのような世界に行ってみたいんだ。」

~~~~~

食料も水も無くなった。

そんな状況の中、気がつけば俺達は囲まれていた。

俺達を囲んでいるのは、サルだ。  
手に槍を持ち、胴に鎧を着けた  
サル！

俺達心情（猿の惑星かよ！）

猿「 & ムキヤー！？」

色の違う鎧を着けたリーダーらしきサルが何かを叫んでいる。  
ツインは泣きそうになり、金村さんは落ち着かせようと頑張っている。

俺「（小声）パンダナ、理解できるか？」

パンダナ「（小声）猿語はさすがに無理ナリ。」

何語ならいけるんだろうか。

俺「（小声）どうする？とりあえず選択肢を提示するな。」

1、周りの猿をぶっ殺す

2、何とか意思疎通を図り助けてもらおう。

3、ツインをオトリにして逃げる。

パンダナ「（小声）個人的には3を選択したいナリが、ここは2ナリね。まずは拙者がアタックしてみるでござる。」

そう言った後、勇ましく一歩前に進み右手を天高く上げ腰を捻るパンダナ。

パンダナ「さあ、サルども、拙者の魅惑のダンスに酔いしれるナリ」

パンダナは魅惑のダンスを踊った。

影山は吐き気を催した。

竹中は吐き気を催した。

ツインは大声で泣き出した。

鏡は混乱している。

金村は吐き気を催した。

サル軍団はシヨックのあまりに気絶した。

パパパパ

サル軍団を退治した。

経験値100を獲得した。影山はレベルアップ

竹中はレベルアップ

ツインはレベルアップ

鏡はレベルアップ

金村はレベルアップ

・  
・  
・  
吐き気を催しながらサル軍団をHPが無くなるまで叩きまくった俺達。

HPが0になったサルはパシューと言う音とともに消えたので、大した罪悪感も無かった。

俺「何も落とさなかったな。」

この世界の金やアイテムを落とすと思ったんだが…。  
ってか槍と鎧まで消えたよ

ガサガサ

ガサガサ

何か近づいて来る。またサルどもか！？  
警戒する俺達。  
そしてまた踊り出そうとするパンダナ

## 6話

俺「誰だッ！」

手に持っている石をいつでも投げられるように構える俺

？「おっと、落ち着いてくれ。  
敵じゃない。むしろ味方だ。」

そう言いながら登場したのは  
腰まで伸びている金髪  
学ランのような白い服  
そして口に薔薇をくわえている  
そんな男だった。

・  
・  
・  
俺「・・・っは！」

未知との遭遇に少しばかり思考が停止していたようだ。  
あんないかにもナルシストっぽいやつが存在するだなんて。  
アニメ世界だけの住人だと思っていたのに、異世界って広い！

？「おや？起きたかい？」

ナルシストが声をかけてくる

？「それにしても、そんな装備でよく西の野蛮人どもを倒せたね。  
すごいよ、影山君」

俺「西の野蛮人？つてかどうして俺の名前を？」

？「君が意識を失っている間に、竹中君たちからこれまでの経緯は聞いているよ。」

俺「そうですか。あと、アイツ等を倒したのは俺じゃないっすよ。」

？「そうなのかい？」

誰も話してくれないから、てっきり君が倒したものだと思っていたんだけどね。」

たぶん、パンダナ自身恥ずかしくなって言えなかったんだろう。

あんな踊りで倒したただなんて

（番外）

葛西 美紀

葛西美紀

公立凸凸高校

3年2組8番

彼女はいわゆるお嬢様という存在である。

親は世界相手にマネーゲームを仕掛け、勝ったと言われている、葛西グループのトップ

葛西 雄二

その一人娘である。

彼女には常にボディガードが数人ついている。危険が無いように、悪い虫がつかないようにと。そんな彼女が口癖のように呟く言葉がある。

「お金なんていらぬ。自由に外で遊んでみたい。」

鏡 良美

公立凸凸高校

3年2組6番

彼女は葛西 美紀のボディガード。いや、「盾」と言った方が正しいか。

普段は友人として、事が起こればとしてその身を投げ出す。孤児だった彼女はそう育てられて来た。

鏡 良美は葛西 美紀を憎んでいる。

チャンスがあれば殺すとまでも。

それはなぜか

理由は葛西 美紀の言葉にある。

お金なんていらぬ。

ふざけるな！

お金なんていらぬだと？

親の金を好き放題使っているくせに何を言う！  
私の親を追い詰め、私を孤児院に叩き込んだヤツの娘が！

…殺してやる

逆恨み？知ったことか！

他のボディガードに邪魔されないように、確実に、そして誰にも  
きずかれないように。

必ず、必ず

コロシテヤルツ！

パンダナ

本名：不明

彼は葛西美紀のボディガードの内の一人だ。

ただ彼女はパンダナがボディガードだということを知らない。

実力はトップと言っても間違いないレベルである。

そんな彼が何故オタクになったのか。

葛西美紀は、よく日本橋のゲームショップやアニメショップに行く。  
護衛するために自身も客のフリをして店に入る。

気がつくどトツプリハマっていた。

そんなパンダナは鏡 良美が葛西 美紀に殺意を抱いているのを知  
っていた。

しかしそれはどうでもよいことだった。

「何があっても葛西 美紀を死なすな」

それが与えられた命令だ。

要は自身が護衛中に彼女が死ななければ、誰が手を出したとしても関係ない。

そんなことよりも今日発売のゲーム事が気になる。

天王寺にある学校に向かう彼女の護衛中、そのことばかり考えていた。

## 6話（後書き）

何だコレ（笑）

正直な話、私はこの厨二小説の内容をほとんど覚えてません。

まさかこんなキャラ設定が、、、（爆）

きっと過去の私は未来の私を笑い死にさせるつもりだったんですね

こんな小説ですが、続きも観てやってください。

それでは

## 7話

### 竹中視点

突然登場した男

白い、白い服を着た金髪、そして薔薇の薫り。  
あつ、こつちを見た。

? 「諸君、あの野蛮人をやるとは見事だよ!」

言い終わらないいちに薔薇を啜え美のポーズ。

気付けば意識を失つてある影山。

パンダナさんの踊りを真横で観ていたからなあ。

? 「ふむ、君達は、いや君達も日本人なのかい?」

!!!?

竹中「何故そのことを!?!」

実は在日韓国人です、と呟く金村さん。

よく分かっていないツイン。

妙に鋭い目つきで相手を観るパンダナさんと鏡さん。

? 「落ち着きたまえ。先日、日本から来たと言う者達を保護した。君達と雰囲気似ていたのね。もしかしたら、と思ったただけさ。さて、良ければ君達を保護したいのだが、どうかな?」

パンダナ「そうして貰えれば有り難いでござる。」

即答するパンダナさん。

まあ、当然の判断だろう。

？「よし。では行くつではないか。ついてきたまえ。」

パンダナ「影山氏は拙者が運ぶでござるよ。」

影山を背負うパンダナさん。

俺は（助かった）そう思いながら彼の後を追った。

竹中視点終了

俺が起きた場所。森の中にそびえ立つ城、の中。

俺は竹中と薔薇の男から、意識を失っている間に行われた会話を教え貰った。

ちなみに彼の名前だが

オスカルⅡ フィリオⅡ ナルシスト

と言う名前らしい。俺は面倒くさいので

ナルシス

そう呼ぶことにした。

彼もパンダナと同じで敬語はいらぬとのことだ。

正直助かる。

俺「ナルシス、俺達以外の日本人つてのにあわせてほしいんだけど。」

ナルシス「分かった。ついてきたまえ。」

皆を呼んで俺達以外の日本人に会いに行く。

知り合いがいたら爆笑ものだな、そう思いながら。

俺「フハハハハッハッハッ！アーハッハッハッ！」

居たよ

マジで知り合いが居た！笑うしかないだろ！

川野 竜彦

坊主頭で眼鏡をかけた、高校からの友人だ。大学は別だが。

そこには川野を含めて三人居た。

川野 竜彦（男）

鈴木 花代（女）

井上 真奈（女）

の三人だ。

彼等のこれまでの経緯はこうだ。

彼等は大学で知り合い友人になった。

ある日、皆で教室を出るとそこは森の中。

後ろを振り向いても扉は無くなっている。

仕方なく助けを求めさまよっていたところ、サル軍団に襲われた。

が、ナルシス達に助けられ、保護して貰ったとのこと。

ちなみに彼等も財布やケータイは捨てていた。

なぜか。

河野は俺やパンダナと同じだからだ。

ジャパニメーション万歳！

・

・

・

川野「影山。実はな、な、大田もいたんだ。サルに襲われた時にはぐれたんやけどな。」

俺「マジかよ。」

大田

こいつも友人だ。

川野と同じ大学に通っている。

俺「まあ、大田のことだ。大丈夫だろうよ。」

川野「それもそうだな。大田だしな」

妙にバイタリテイのあるヤツだからな。

川野と感動の再開？を終えた処で、ナルシスからこの世界のことを聞いた。

この大陸は四つの勢力に分かれている。

北方の草原

竜人の治める土地。

長は竜神と呼ばれる者

南方の森林

光環人が治める土地。

俺達はここにいる。

西方の荒野

猿人の徘徊する土地。

長は大狂猿と名乗る。

動植物は少なく、南方から略奪するため戦争をしかける。

東方の神殿

神の下僕が治める土地。

西の猿人すら手を出さない、神に祝福された最強の民だ。

。 四つの土地の中心に、頂上の見えない山がある。その名も『天刺山』

• •

・  
俺「いろいろ質問があるんだけど、何かから聞いていいのかわからん。」

ツイン「もうサッパリッてカンジ。( ? | ? )」

7話（後書き）

、  
、  
、

ツッコミきれないだど!?

過去の私はいったい何を考えていたんだ!

∴ 光環人つてWWW

天刺山つてWWW

もう、、、ね（笑）

## 8話

俺「まず、光環人って何スか？」

ナルシス「光環人とは」

光環人こうわじん

自身を光の環リングに変化させられる者。またそれを装着できる者。相性の良い者が装着することにより、環から武器へと姿を変える。環になる者の多くは女性であり、環を使う者は装飾者と呼ばれている。

俺「ナルシスも装飾者なのか？」

ナルシス「もちろんだとも。ちなみに君達も光環人になれるのさ。」

パンダナ「なりたいナリ！」

ナルシス「なら、この秘伝書を読みたまえ。」

金村「待つてください。ナルシスさん。

環となったあと、元の姿に戻ることができるのですか？」

ナルシス「もちろんだとも。ノーリスク ハイリターンをお約束します。」

言い方が怪しさ爆発気味ではあるが、金村さんや竹中など不安があった者は安心したようだ。

パンダナ「それじゃあ読むナリよー」

秘伝書

「よい子のみんなで光環人になろうー」

1、まず、手のひらを合わせましょう。

2、「光環人になあれ（はあと）」と三回唱えましょう。

3、これでもう

貴方は光環人です。（運が良ければ）

- - - - -

俺達「フザケルナーツ！！#」

・

えー、俺と金村さん以外なれました。光環人に。

竹中、川野、パンダナ、鈴木さんは装飾者に。

ツイン、鏡さん、ポニーは  
リング  
環になりました。

え、ポニーって誰だって？

井上 真奈さんです。

髪型がポニーテールだったんっすよ。いいよね。ポニーテール。俺は好きだ。ポニーテール最高！・・・

パンダナ「相性どうやって調べるナリ？」

ナルシス「それも秘伝書に記されています。(にっこり)」

嫌な予感が、、、、

## 秘伝書

### パートナー編

「相手がいない時はこうやって捕まえよう」

### ステップ1

「告白しよう」

気になる相手に勇気を出して告白だ。

オーケーされたらパートナーの出来上がり。

パンダナ「ふっ。ここは拙者からいくでござるー！」

ざわ・・・

ざわ・・・

突然のパンダナの発言に皆驚きを隠せない。

いったい誰に告白するのか？鏡？ポニー？それともまさかツインか！

パンダナ「拙者の、拙者のパートナーになって欲しいでござる！  
お願いナリ！

ポニー、いや井上さんっ！」

お辞儀をしながら右手を突き出すパンダナ

言っただー！

ポニーに言った！

審判、判定は！？判定はいかに！

ポニー「えと、あの、ゴメンナサイッ！！」

アウトーッ！

パンダナ選手アウトです！

・・・

川野「他のやり方は無いんか！？」

ナルシス「続きがあるだろう。ちゃんと読んでくれたまえ。」

秘伝書

パートナー編

ステップ2

「アミダクジ」

告白できないシャイな君達。

アミダクジをしよう。装飾者と光環者、同じ数でやろう。

上に装飾者、下に光環者の名前を書いて適当に線を引こう。繋がっ

た相手が君のベストパートナーだ！

何かものすごくバカにされているような気がするが、とりあえずアミダクジを試してみようか。

・  
・  
・  
決まった。

竹中と鏡さん。

鈴木さんとポニー。

パンダナとツイン。

川野は

川野はナルシスが連れてきた光環人の      ソフィア「リンカ」  
ナルシス（女）と言う人がパートナーになった。  
名前から分かるようにナルシスの娘だ。年齢は二十五歳

#### 人物紹介

鈴木 花代（女）

十九歳

短く切った髪に中性的な顔立ち。  
高校三年間陸上部だったそうだ。

井上 真奈（女）

二十歳

ポニーテールの大和撫子（誇張）

今年二十歳になったとのこと。

あだ名はポニー。既に定着させましたよ。

ソフィア⇨リンカ⇨ナルシスト（女）

二十五歳

髪型は肩までのウェーブで碧眼

ナルシスが十八歳の時に生まれた娘さん。

オスカル⇨フィリオ⇨ナルシスト（男）四十三歳

常に白い服を着た人。南の森の偉い人。外見は二十五歳ぐらいにしか見えない。

皆パートナーも決まったことだし、装飾してみよう。

川野「で、どうすればいいんや？」

ナルシス「お互いの手を合わせて蒸ちゃ、、、イヤイヤ、装飾ツ！  
と言っただけさ」

また安直な。

鈴木「とりあえずやってみますか」

ポニー「そうですね。」

鈴木・ポニー「装飾ツ！」

ポニーの身体が光だす。光は環となって鈴木さんの腕にはまる。そして環が形状が変わり始める。

鈴木さんの両手が光りだし、光は剣へと姿を変える。双剣。

それが鈴木さんとポニーの光環人としての新たな姿。

ポニー「なんかこう、変な感じがしますね。」

鈴木さん「まあ、そうですね。体が二つに分かれているんだから」

皆の武器の形状は、

竹中・鏡

鈴木さん達と同じ双剣

パンダナ・ツイン

両手に青い小甲

川野・ソファイア

日本刀

ナルシス「さて君達、特訓だ！

光環人となった君達は戦う力を手にいれたが、まだまだ弱いからね。だから特訓だ！」

こうして竹中達の特訓の日々が始まった。

え？  
俺と金村さんは放置ですか？

## 大田千夜物語

### 一日目

大田「はあ、はあ、はあ」

走る、走る、走る。木の枝をかき分け、木の根につまづかないようにきをつけながら、走る。

サル「ウキー！」

後ろからサルの声が聞こえてくる。

川野達とこの世界に来てから変なサルに襲われた。逃げていた最中に川野達とはぐれてしまった。無事だろうか、、、

大田「うわッ！！」

考え事をしていたせいだろうか、無様にもこけてしまった。

サル「ウツキツキツ」

サルがニヤニヤしながら近づいてくる。

大田「どうするよ。俺」

そんな時、僕の頭に電波が、衝撃がハシル！

踊るナリ  
魅惑の踊りを

大田「う、うわあああつ！」

体が勝手に動きだす！

手をくねらせ、腰をふり　そして決めゼリフ！

大田「僕の魅惑のダンスに酔いしれな！」

ビシイ！

サルは魂を抜かれた。（死亡）

大田「ハア、ハア、ハア」

今のはいったい、、、？

そんな時だ。光りの差し込む方から声が聞こえてきた。

？「お、お〜！救世主様だー！」

やはっ！

みんなこんにちは！大田だよ。

自己紹介して無かったね。

今からするよ。

僕の名前は

「大田 雅樹」

二十歳

眼鏡をかけて、常に笑顔を絶やさないナイスガイさ。

そうそう、昨日起こったことを教えよう。

昨日あの後、、、

？「救世主様だー！」

大屋「うわ！」

声のする方を見て、僕は驚いた。

ケンタウロス

そう、そこには

ケンタウロスが立っていたのだ。

そうして僕は、気絶した。

・  
・  
・  
んで今

気がつくくとベッドの上で寝かされていた。

？「お目覚めですか。救世主様。」

声のする方を見ると昨日のケンタウロスがいた。

落ち着けッ！

し、深呼吸をしる！

すう〜、はあく〜。よし！まずは相手をよく見る。

上半身は男性

下半身は馬

上半身は裸

下半身は

何て言うんだらう？腰布？を巻いている。

大田「えと、どちら様で？」

ケンタウロス「これは失礼しました。私はトアルと申す者です。」

大田「えと、トアルさん。ここは何処ですか？」

トアル「ここはカマツク神殿です。」

と、言う風に僕はトアルさんに質問していった。

トアルさんによると、この大陸は四つの勢力に分かれていて、ここは東にある神殿の一室であるとのこと。

カマツク神殿のカマツクとは、創造神の名前だそうだ。  
んで、北方の竜神が

「我こそが唯一絶対の神である」

とかいいだし、  
西方の猿人と手を組んで南の森を支配を企み、そして北と南から東を攻撃するつもりらしい。

現在は北方との境界に巨大な壁を作り、北方からの進入を拒むつもりとのこと。

西方から東方に進入が行われぬのは、天刺山と言う高い山がそれをほぼ不可能にしているんだとか。

大田「あと、救世主とは？」

トアル「そう、救世主とは、

戦乱の世、邪神が創造神を喰らおうとした時、颯爽と現れ聖なる踊りで世を鎮め、我々と共に邪神を討ち滅ぼす者。

と、聖なる踊りと共に言い伝えられている伝説です。

そして貴方は聖なる踊りを踊り見事、邪神に組する者を討ち滅ぼしました！貴方こそ救世主様！我々をお導きください。」

・・・

、、はッ！

突然の出来事に思考が停止していた。まさに

思考回路はショート寸前

である。

イヤイヤ現実逃避は良くない。

んだば、どうすっぺ？

救世主さ、言われてもおらにはどーにも、、

？「兄さん、落ち着いてください！」

僕がどうしていいか分からず、混乱している時、扉から女性の声が

聞こえた。

・  
・  
・

トアルさんと女性が何か話している。

しかし僕はまったく別のことを考えていた。

分かってはいたんだ。そんなことが有るはずが無いとは。  
でもさ、期待するでしょ。

トアルさんは上半身裸。つてことは女性も！？つてさ。

女性は乳房に布を巻き、服を着ていましたとさ。

分かっていたんだよ？そんなこと無いつて、、

・  
・  
・

女性「あの、救世主様？」

はっ！

大田「は、はい！何でシヨウカツ！？」

女性「だ、大丈夫ですか？」

トアル「はっはっはっ！大丈夫に決まっているさ！なんたつて救世主様だからな！」

女性「なんで兄さんが答えるんですか！だいたい兄さんはいつもいつも〜！」

めちゃくちゃ長いので略さしてもらいます。重要なことだけ抜擢し

ますです。

この女性はトアルさんの妹さん。  
彼女の名前は「ミラ」。  
長い蒼髪が輝く素敵な女性だ。  
彼女といろいろ話し合った結果、  
僕は救世主、この神殿の指導者となりました。（笑）

## 二十日目

民衆「大田様万ざーい！救世主様万ざーい！！」

・  
・  
・

ヤア、みんなこんにちは！

大田だよ！

この世界に来てから

もう二十日もたちました。

ああ、いろいろあったなあ。

ミラさんの言っていることに適当にうなずいてみると、神殿で「洗礼」されて、民衆の前に立たされて、演説

大田「今、世は乱れている！

私はこの事態をなんとかしたい！

しかし私には力が無い！ならばただ見ているだけか！？

否ッ！だんじて否ッ！！今こそ立ち上がる時である！

諸君、私にその力を貸して欲しい！共に邪神を倒そう！

創造神カマツクの名に掛けて！」

とか

こんな感じで演説すること数回、  
救世主と言うよりは教祖ってな具合です。  
あとはトアルさんとミラさんにおまかせっ！  
ミラさんいわく

ミラ「北と南から同時に攻められるとダメですが、どちらか一方なら何とかできる戦力になりました」

とのこと。

たぶんしばらくはこういった生活を繰り返すと思います。はい  
ちなみにトアルさんとミラさんは大神官です。えらいんですよ

今日は演説のあと、民衆の前で「聖なる踊り」を踊りました。  
前に踊った時のことは忘れていたのだけでも、トアルさんいわく  
「魂に刻まれているのですよ」  
とのこと。

決めゼリフの

「僕の魅惑のダンスに酔いしれな！」  
を言い終えると鼓膜が破れるかと思っただほどの拍手が（汗）。気絶  
する人（？）も出たとか何とか。

・  
・  
・  
夜、空を見上げながら川野達のことを想っていた。、、、無事だとい  
いいが。



## 大田千夜物語（後書き）

今回は少しセルフツッコミをいれてみました。

・千夜も無い

・東にも南にも侵入し、さらに外交までこなすサル最強説

・神官は神でも拝んでいる。武力介入すんな。

・ミラ：誰だよ？いろいろあったなああの所が説明足りんよ。

・猿に侵略許しまくりの光環人敵しかない涙目。

・大田達が俗物、俗人すぎる。

【俗人】「意」名声や利害ばかり考えている人。

【俗物】「意」高い理想や高尚な趣味を持たない、くだらない人間。

やはり、生の感情をむき出しにして戦うなど、これでは人に品性を求めるのは絶望的だな。

ズガンダムのパプティマス様の言いたかったことが分かりましたよ

…

## 9話（前書き）

この話、「RPG W」・・・「RLD」との接点がありませんので軽く設定を記しておきたいと思います。

### 世界観設定

原作舞台、「ギヤスパルクの復活」の世界エターナルにある大陸。特殊な力により外界から見えなくなっており、原作主人公「巖島勇吾」達はこの大陸のこと知らない。という設定。

### 時期設定

原作主人公がエターナルにくる一年前

こんなものでしょうか？

これから少しずつRPG W）・・・RLDとの関わりが出てくると思います。

## 9話

?「おい、起きろ。」

誰かが俺を揺さぶる。

誰だ?男の声がする。

川野「影山!起きろ!」

なんだ。川野か。

どうせなら女の子に起こして欲しかった。

川野が俺の首をつかみ起こそうとする。

仕方がない。起きるか。ところで首掴むって酷くね?

俺は勢いよく立ち上がろうとして

川野「うおッ!?!」

勢いの余り滑って DDT!!

俺「ぐはあっ!?!」

・  
・  
・

川野達光環人組が修行を始めて今日で三十日目。

いろいろやってました。

重いカメの甲羅を背負った生活、滝の上から落ちてくる岩や木を破壊したり、光環人の戦士と模擬戦闘していたりしていた。

その中でいろいろと分かったことがある。

まず一つ、装飾状態のことだが、

装飾者の意志か、装飾者の精神（MP）が無くなった時に装飾は解かれる。

光環者は、環（武器）の状態から人に戻る。

つまり、装飾を解くかどうかは装飾者に委ねられる訳だ。

次に装飾者が殺された時だが、

光環者は人に戻れず、武器（環）の状態で死ぬ。

三つ目、仲の良い環と環は連絡を取ることが出来る。

ポニーやツインによると、「携帯電話をかける感じ」とのこと。

最後に装飾者と光環者の念話。

まあ、ようするに心の中で話すってことですよ。

信頼しあっている者どうしならば、念話の応用で、光環者が装飾者を操ることができる。

装飾者が混乱や気絶している時に敵から逃れるために操るとのことだ。

ま、光環人に成れなかった俺や金村さんには全く関係ないがな！！

まぶしい、朝か？

、、、頭が痛い。カレンダー（金村さんが作った）を見る。

(この世界に来て)三十八日と記されている。  
あれ?今日は三十七日目じゃあなかったっけ?

川野「影山、起きたか。」

声のする方を見ると川野がいた。

俺「川野、カレンダー間違えているぞ。」

川野「いや、日付はあっているんだ。」

俺「?」

川野「正直、すまん。実は昨日の朝、お前にDDTをかけてしまったんだ。お前は目を覚まさずに翌朝、つまる今、ようやく目覚めたと言っ訳なんだ。」

俺「、、、川野、明後日の模擬戦闘、覚悟しろ。(にっこり)」

俺の笑顔を見た川野はその時何故か、本当に何故か(犯されるッ!  
!)と思いつ尻を守ったそうなの。

さて、川野達が光環人として修行している時に俺と金村さんが何をしていたのかを語りたい。

簡単に言うとジョブチェンジ。そしてレベル上げ。

本当に大変だったんすよ。  
聞いてくださいよ。

あれは川野達が修行開始し出した日 - -

## 10話

俺と金村さん、光環人に成れなかった組はジョブチェンジするために砦の中にある、ドラクエで言うところのダーマ神殿へ行つた。

…つと、話を続ける前に訂正を。

俺は今いるこの場所を「城」だと言っていたが、それは俺の勘違いだらしい。

城では無く「砦」。

西との境界線にある最前線防衛砦だとのこと。

現在いる砦を前とすると、右と左にも少し小さな防衛砦が有るらしい。

そしてその砦と砦の間から小型の偵察サルが侵入することがあるんだそうだ。

俺達が始めにあつたサルがそれだとナルシスから教わつた。

…

さて話を続けよう。

ダーマ神殿（仮）に向かう途中、会う人会う人全員が俺と金村さんを見下し蔑み哀れんだ視線を投げかけてくる。

10人目辺りで流石に頭にきたので、いったい何やねんと怒鳴りつけようとしたが「…先を急ぎましょう」と金村さんに制されたので視線にはシカトを決め込みダーマ神殿（仮）へ。

ボロい、、、  
ダーマ神殿（仮）についたのだが、まず木製の扉が歪んでちゃんと閉まらない。

部屋の中は埃と蜘蛛の巣が。ここは針井歩田亜の部屋か？

部屋の奥からプルプル震えているおじいちゃんが出てきたのでこの部屋で正しいのか？などいろいろ質問してみた。

おじいちゃんによると

この部屋はダーマ神殿（仮）である。

何故こんなにも廃れているのかというとな南の人間の9割が光環人であり、そうでない者はある種の差別対象となっており、現在この砦には俺と金村さんしかいないとのこと。

なるほど

あんな視線が浴びせられる訳だ。

まあ、それはそれとして今はジョブチェンジですよ。

早速転職させてくれって言ったら「無理」って言われました。

なんでもレベル15以上ないと転職できないとか。

そういえば俺まだレベル5だったよ…

ナルシスに相談しに行ったらレベル上げを手伝ってくれるとのこと。  
イヤッホイ

それでは行くこうじゃないかと外に向かおうとしたのだが、ちょっと待てナルシス。

俺と金村さんの装備。

石と木の棒にただの服なんだけど、

こんな装備で大丈夫か？

「大丈夫だ。問題無い」

つて、それ死亡フラグだから！

装備何とかしてくださいよお願いしますよ。

と、頼み込んだら何とかしてくれますた。

新装備御開帳！

武器 木刀

防具 布の服、肘当て、膝当て、手甲、足甲

、、、 剣とか鎧とか重くて装備出来ませんでしたよ…orz

そんなこんなで漸くレベル上げに出かけました。

ナルシス敵を引き付けている間に、俺と金村さんが後ろから叩いて叩いて叩きまくる作戦でGO！

デカイ蟻やデカイ蜘蛛、二足歩行で人間サイズのトカゲなんてモンスターがいたよ。ものすごくキモかったです…

## 10話（後書き）

今までで一番加筆修正が多かった話です。

いきなりですが

高校生の頃に書いたこの小説ですが、

竹中（仮名）にメールで送っていたらしいんです。

、、、大学一年生の時に、、、

過去の私はいったい何を考えていたんだ、、、orz

衝撃の事実にも大な精神ダメージを受けたFでした。

## 光環人模擬戦編 1

鈴木 花代視点

修行二十五日目

場所は森の中、

相手は川野

腕には環を、身体には鎧

今から私達は、模擬戦闘を始める。

ナルシス「戦闘開始！」

ナルシスの掛け声と共に私は双剣を、シャインアンドダークネスを手にする。

・・・言い忘れていたが装飾者は環（武器）に名前をつけるのが相手への礼儀とされている。

私は左剣をシャイン、右剣をダークネス  
川野は叢雲、

パンダナはダブル・ハンマー、

竹中はブラッティクロス

とそれぞれのパートナーと相談して決めた・・・

木を盾にしながら川野が私の後ろに回り込もうとする。

私は木など気にせず川野へと直進する！

ポニー（鈴木さん！無謀過ぎます！）

ポニーが念話で俺に注意する。

私(すまない、今回は好きなようにやらしてくれ。アイツには借りがあつてね)

ポニー(、、、今回だけですよ)

私が少々キレ気味なのを感じたのか、ポニーはあきれた様子で引いてくれた。

ポニーとやり取りしている内に人影が見えてくる。

私「セイツ!」

右から左へと影を一閃いっせんするが

私「!?!」

人影だと思つた物はただの木の人形!

川野「ハッ!」

木の上からこの隙を待つていたとばかりに、川野が逆刃の叢雲を飛び降りながら、振り下ろす!

私「くわっ!」

食らつてたまるか!

私は思いつき横に跳んだ。

追撃が来ると思い双剣を構えるが、そこに川野はいなかった。

ポニー（少しは落ち着きましたか）

私<sup>まわね</sup>

ざわざわと木の枝同士がこすれるような音がする。

ポニー（誘われていますね。どうします？さっきみたいに突撃しますか？）

私（さつきすまなかった。落ち着いたので協力してほしい）

ポニー（分かっていますよ。で？どうするんですか）

私（木が邪魔だからね、牽制ついでに・・・）

私「斬るッ！」

私のウエスト程度の太さの木を、音のする方向に切り倒して行く。後には斬り合えるほどの広場ができていた。

私「川野！場所は作ったぞ！決着をつけよう！」

川野「そうだな。疲れてきたしな」

後ろを向くと、目測八メートルの位置に川野が出てきた。

私「なら、次で決めよう」

そう言いながら私は腕を交差させ、川野は上段に構える。

私（ポニー、あの技をつかうぞ）

ポニー（分かりました）

前に、私は双剣を使う戦士にある技を教えてもらった。

簡単だけど難しい。そんな技だ。腕を交差させて、片方の剣で、全力で相手の得物を逸らす。そしてもう片方の剣を全力で叩き込む！  
ここまででは簡単なのだが、これからが難しい。

全力で行動するところらの攻撃が逸れてしまい、うまく行かない。  
しかし戦士はこう言った。パートナーが頑張ればうまく行く！と。  
つまり、全力で攻撃する時に、行動補正する力（操る力）を使い、  
攻撃の軌道を補正するのだ。

私と川野の間に風が吹く。

「行くぞッッ！」

川野が地を揺るがすような踏み込み、そして放たれる必殺の縦一閃！

私「ここだーッ！！！」

私が右剣ダークネスで川野の叢雲を逸らす！

川野「な、何イイツッッ！」

そして隙だらけの胴に左剣シャインを叩き込こむ瞬間！

ナルシス「そこまでだ！！」

審判のナルシスが止めに入った。

・  
・  
・

今、森では竹中とパンダナが模擬戦闘を行っている。  
音を聞く限り竹中が押されているようだ。

私「やあ、借りは返したよ」

川野「いくら鎧を着ていたからといっても、最後のがまともにと  
つていたら死んでたぞ、あれ」

私「お互い様だろ」

私と川野は互いの肩を叩き、笑った。

ソフィア「友情って素晴らしいですね」

感動の余りに涙を流すソフィアさん。

ポニー「ところでさん。借りって何ですか？」

私「ああ、それはね…秘密だ」



## 光環人模擬戦編 2

竹中視点

声がする - -

恨みの - -

憎しみの - -

妬みの - -

声がする。

・

・

・

パンダナ「フッ！」

パンダナさんがこちらの死角に入りなが、ダブル・ハンマーで俺の顔を軽く打つ。

重傷にならないように手加減してくれているのだろう。

しかし、そんなことはもうどうでもよかった。

手足の感覚はすでにない。意識が少しある程度だ。

そんな俺の身体がパンダナさんを斬りつける。

軽く避けられてポディーに五発。

痛みは感じない。身体が勝手に動く。俺はただ声を聞き、そして委ねる。

声がする - -

壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ - -

葛西美紀を、殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ - -

俺は目を閉じ、

すべてを預けた - -

殺せ

殺せ殺せ

殺せ殺せ殺せ

殺せ殺せ殺せころ

意識が途絶えた

鈴木 花代視点

結果をいうと、パンダナさんに負けた。

パンダナさん強すぎ

竹中は一回目のパンダナ戦で気絶  
以降不戦敗

模擬戦闘結果

私 2勝1敗

川野 1勝2敗

パンダナ 全勝

竹本 全敗（二戦不戦敗）

・・・  
私「パンダナさんが強すぎる」

全員で休憩している時、私はパンダナさんの話を切り出した。

川野「確かに、手加減されてアレだからなあ」

パンダナ「ンッフ、ボクシング漫画に憧れて、ジムに通っていたことがあるナリよ」

パンダナさんが昔、「ミミズ臭い」とか言われてイジメられていたから笑えるね。

パンダナ「そういえば鈴木氏に川野氏、なんと言うか、、『必殺技』を使っていたナリがアレは何でござるか？」

私「あの技か」

川野「装飾者と光環者が同調して補正するってヤツだろ」

ポニー「川野さんもしっていたんですか!？」

少し驚いた様子で川野に確認するポニー

川野「ソフィアさんに教えてもらったんよ」

ソフィア「あの技は、光環人にしか出来ない、ある意味奥義ですからね。」

鈴木さん達が使うとは思ってもみませんでした」

私「双剣の戦士に教えてもらったんですよ」

ポニー「何かずるい！（、、）（、、）」

パンダナ「まったくナリ」

私「だったら教える。あの技を」

川野「ってかさ、あの技って微妙じゃないか。技名をつけよう」

ポニー「技名ですか、、、」

・  
・  
・

パンダナペアにあの技を教えました。

むっちゃしんどい。え？竹中はどうしたって？

竹中と鏡はまだ寝ていますよ。

川野「で、みんなは技名を決めたのか？」

川野の問いに私が聞き返す

私「そういう川野は決まったのか？」

川野「もちろんだ。上段からの必殺の一撃、その名も『牙狼一閃』」

牙狼一閃か、私はどうするかな

パンダナ「拙者らは、二十二式風お、、、」

私「駄目だ！それはダメだよー」

パンダナ「ならブロンマグナ、」

川野「それもダメだろ。オリジナルで行こうぜ」

本当に、危なかった。

パンダナさんの技の使い方は、  
左手を前に出し、右手を引き絞り、対象に向かって右手でパンチ！  
つてな感じ

おろおろ言う主人公がでてくる漫画の新鮮組（誤字）元隊長の使う  
技っぽい。

パンダナ「なら、『ブルー・スマッシュ』にするナリ」

パンダナさん達はブルー・スマッシュか

私「私達はどつする？ポニー」

ポニー「武器の名前を入れましょうか」

武器の名前

シャインアンドダークネス

私「長すぎだ！短くいこう」

ポニー「なら、ん〜、光闇なんたらで」

シャイン〓光

ダーク闇

ふむ

私「なら『光闇両断』(こつあんりょうだん)で

ポニー「それにしましょう」

決定

光環人模擬戦編 2 (後書き)

電車で異世界物語の続きを探していると  
中学生の頃に書いた物が、、

ハハ、、

「アフターヒーロー」ってタイトルもつけてましたよ…

まだ先の話ですが、電車で異世界物語が終わったら載せると思っ  
てその時は読んでやってください。

## 11話

そんなこんなで漸くレベル15になった俺と金村さん。

ダーマ神殿（仮）に行つて待望のジョブチェンジ！

戦士、剣士、格闘家、見習い魔法使い、駆け出し召喚士、衛生兵、アイテム士、  
、等いろいろあった。

俺は剣士（何かカツコイイから）、金村さんは駆け出し召喚士（数は力、だそうだ）になった。

レベルも上がりジョブチェンジも果たしたので、装備品を新しくしよう和金村さんと二人で装備屋に向かった。

装備屋で剣士になったから武器を見せてくれと言つと鼻で笑われた。光環人では無いのに加えて今回はナルシスがいないからだろう。

俺は武器を鉄の剣に変え、防具に鎖帷子と腕に装着する小盾を新調した。

レベルが上がリSTRが増えたおかげか鉄だの鎖だのを装備しても大して重く無かったので驚いた。

金村さんも鉄の杖などを買っていた。

装備を変えた後、試しにと外に出て敵と戦つてみたんだが…  
金村さんが、酷かった。

まず、敵（偵察サルレベル10）を近くに引き寄せろ。

次に敵の背後にモンスター召喚（二足歩行悪魔レベル8）をする。その悪魔がサルを羽交い締めにする。そしてそのサルの腹を金村さんが鉄の杖で笑いながら叩きまくる。というような、召喚された悪魔が悪魔に見えなくなるような攻撃をしていたのかなり引いた。

まあ、そんなこんなあつて異世界に来て四十日目。

訓練場所で川野と模擬戦開始しようとした時、砦からナルシスが走ってきた。

ナルシス「君達、大変なことになった！」

走り込んで来るなりそう言うナルシス。

ソフィア「落ち着いてくださいよお父さん。一体どうしたんですか？」

ナルシス「ああ、それは、、、ん？竹本君と鏡君はどうした？」

俺「まだ寝てる。後で俺から伝えておくよ」

ナルシス「そうかい？なら頼む。

んん。大変なこととはね、北方の竜神と、西方の大狂猿とが手を組んで、この森に戦争を仕掛けたのだよ。今、西と南の境界で戦いが起きようとしている。」

・・・

思考がちよいと追い付かんが、いろいろ疑問が、、、

パンダナ「ふうん。ナルシス殿は拙者等に、その戦争に参加しろと、言うわけでござるな。」

パンダナが言った！  
ナルシス「その通りだよ、パンダナ君。君達はもう一般の戦士よりも強いからね。」

ポニー「な！チョット待つてくださいよ！私達は光環人になって、日ほど修行しただけですよ！？なのに一般の戦士より強いってどう言うことですか？」

ナルシス「それはね、我々先天的光環人と違い、君達みたいな後天的光環人は、光環人になった時に身体能力が上昇しているんだ」

何て言うか、都合の良い

金村「しかし、どうして上昇するて知っているですか？この砦には先天的光環人しかいないでは？」

ナルシス「今はね。昔は居たんだよ。でないと光環人の成り方なんて言う秘伝書が書かれる訳が無い。  
まあ、そう言う訳で君達は結構な戦力になる。出来るなら共に戦って欲しいが、強要はしない。パートナーと相談して決めたまえ。明日、答えを聞く」

そう言うとなルシスは砦の方へ戻って行った。

あれ？

俺と金村さん、シカトされてね？

## 12話

翌日

ナルシス「それでは、会議を始める」

皆の会議室に俺達は集められた。

ナルシス「決まったかね？どうするか」

何か会議っぽく無いな。

俺「もちろんだ。全員決まっている」

昨日、あれから話し合ったからな。もちろん竹中も呼んで。

俺「鈴木さんとポニー、あと金村さんは救護兵に、他は皆戦争参加だ。」

ナルシスは軽く驚き、バラの花びらを散らしながら

ナルシス「以外だね。何人かは逃げると思っただが、、、いや、感謝するよ諸君！」

そう言って立ち上がり、

ナルシス「では諸君、ついてきたまえ」

歩きだす。

砦内を歩き、分かれ道で立ち止まった。

ナルシス「鈴木君にポニー君と金村君。君達は右の道を行きたまえ。そしてオスカルの紹介だと言えば良い。わかったね」

え、右手に見えますは、衛生兵の看板でございます。筋肉ムキムキの女が笑顔で親指を上に向けている絵は、無視の方向でお願いいたします。

鈴木「わかりました。じゃあ行こうか」

三人は右の道へ進んで行った。  
んで俺達は左の道へ

左の道を進むと、訓練所と書かれた看板と赤と青、二つの扉が。

俺「せっかくだから、俺は赤の扉を選ぶぜ！」

そう言いながら赤の扉を開こうとするとナルシスに止められた。

ナルシス「影山君。君は青の扉へ。他の者は赤の扉へ」

俺「orz」

光環人とそうで無い者の区別ですか……

ナルシス「さて、私はここまでだ。あとは中にいる者に従いたまえ」

そう言うとナルシスは去って行った。

俺「じゃあ行きますか」

一人青の扉を開き、中に入る。

そこには二人の女性が居た。

右の人「来ましたね。

始めまして。貴方の所属することになった隊の部隊長を勤めるイリスです」

左の人「イリスの姉でパートナーのエリスです。よろしく」

さて、この双子の姉妹にからの説明によると、俺は偵察並びに輸送隊の護衛をする隊に配属されるとのこと。

何事もなければ明後日にでも南の森の民の中心城に護衛の一員として赴くらしい。以上の説明と明後日の集合場所（他の隊員への紹介は当日行つとのこと）を教えられた後、解散となった。

正直気が重い。

俺以外はおそらく全員光環人何だろうな…

また見下されるのかな…

つてか一人。すごく寂しいです…

こうなったら何か起こらないものかとネガティブなことを考えていたら、

大変なことが起こってしまった。

研修および訓練として最前線見回りを行っていた河野達に突如奇襲を掛けて来た北の竜人。

パンダナの活躍もあり追い返すことができたのだが、なんと竹中と鏡がさらわれてしまったのだ！

クソッ

無事でいてくれよ二人とも…

### 13話(前書き)

一週間に1、2度更新すると宣言していたのに期限を破ってしまいました。

この物語を読まれている方々(いてくれると嬉しいなあ)、大変申し訳ございません。

しかも短いです。

すみません…

### 13話

竹中と鏡がさらわれたとの報告から俺達の物語は急激に動き出した。

まず、その報告の後すぐに新たな報告が。

東方の神殿から救世主なる者が来た。

その救世主が俺、川野、鈴木、ポニーの4人に会いたいのだとか。

竹中のこともあり正直断りたかったのだが、そういう訳にもいかず会いに行くと…

大田がいた。

ヤハツ元気にしてる？と指を2本立てながらほざいた時はぶん殴ってやるうかと思っただが

行方不明だった男の元気な姿を見て嬉しかった。

一緒にこの世界に来た川野達は感極まり軽く涙ぐんでもいた。

それからお互いにこれまでにあったことを話しあった。

…突然閃いた不思議な踊りで救世主、か。なんだそれ

話が一段落ついたところで、先に来ていたナルシスが本題に入りたいのでついてきてくれと案内されたら（俺達も許可された）そこには砦大将に副大将、1〜5番隊隊長（ナルシスは一番隊隊長）が。

砦大将とか初めてみたよ。

ずっとナルシスが世話してくれてたからな

…それにしても居ずらい。

オマケの俺達は居ない扱い。帰ってもいいですか…ダメ？そうですか…

大田と一緒に来ていたケンタウロスと砦大将達がなんやかんやと話し合って、話し合った。

南と東で同盟を組むことになった。

北の竜人と西の猿人が天刺山を制圧し、そこを拠点に南と東を一気に攻める。との情報を潜入兵から報告があったので協力してこれを阻止することが決まった。

俺は先ほどの配属を取り消され大田の護衛（と言っなの人身御供）にまわされた。

なんでも同盟の証としてそれなりの地位の信頼できる者を寄越してもらいたいのだとか。

でだ、ああ見えてナルシスは過去に南方の森林を救ったことがあり一時期は英雄ともてはやされたことがあり、その男の客人扱い（それなりの地位）で大田の友人（信頼できる）である俺が選ばれた訳だ。光環人でもないしな。

話し合いが終わり、張り詰めた空気が弛緩しだしたところで伝令が飛び込んできた。

竜人と猿人が天刺山に向かって動き出したそうだ。

しかもその中には北の長「竜神」と西の長「大狂猿」の姿も確認できたらしい。

南東同盟も天刺山へ向けて動き出した。

もしかするとこれが決戦になるかもしれない。  
そんな誰かの眩きとともに…

## 14話

二足歩行

腕が四本

各手には石の柱

筋骨隆々で身長がおよそ8メートル（俺の約5倍）

俺の胴回りより太いんじゃないの？って言うような尻尾が鞭のように唸っている

こんなボス『大狂猿』と対峙してます。

あれ？

大田って救世主だよな？

お偉いさんだから後方から指示だの声援だのをするだけで、

大田やその護衛の俺も安全第一の場所に居るものだと思ってたのに、  
何故に最前線？

- - - - -

簡単に説明しよう

西の猿人が天刺山から南の森へ侵攻しようとして行動

北の竜人は天刺山頂上へと登山。

長の竜神が竹中を連れているのを確認（鏡は環の状態で封印されて

いるらしい)

じゃああれだ。大田の踊り、猿人に効くからそっち頼む。  
竹中も確認されてるし、竜人は光環人の方でなんとかすらあな。

南(光環人)、東(救世主&ケンタウロス)の両軍行動開始

東、天刺山エリアと南の森エリアの境目で猿人と接敵

大田、不思議な踊りを踊る

猿人、混乱&ステータスダウン

ケンタウロス、「うおおおおおおッ！聖なる踊りじゃー！！！」  
ステータスアップ

俺、オリジナル？(パンダナ)の踊りを観たため耐性持ちにより効  
果なし

大田、調子に乗って前に出る(ここからが間違い)

俺も役目上前に出る

大田、更に調子に乗って・・・

何度か繰り返し

大狂猿登場 今二二

説明終了

- - - - -

大田が踊り、猿人のステータスダウン&ケンタウロスのステータスアップ

ケンタウロス5人？が大田を護衛（シュワルツエネツガー並みの肉体を持つ壁役。ステータスダウンしている大狂猿が大田に向かって突っ込んできたら、それを防ぎ押し返す）

ケンタウロスエリート兵士8人が大狂猿とバトル

ケンタウロス魔法使い2人が援護

（魔法使いにみならず！魔法使いだ！って言った。ウィンドカッターをヒズメカッターって言ったが、違いがわからない）

周囲に湧き出る雑魚猿人を一般ケンタウロス兵士が刈っている。

え、俺？

俺はすり抜けてきた雑魚猿人殺したり、

大狂猿に石投げたりしてます（笑）

ちなみに体感としてはモンスターハンターで大型獣狩ってる最中、みたいだな。



## 14話（後書き）

続きが、続きが見つからない（焦り）

そういう訳で来週は更新しません。

本当に申し訳ありません…

変わりと言ってはなんですが、以前言っていたアフターヒーローを  
放出させてもらいます。

よろしければそちらの黒歴史もみてやって下さい。

それでは…

## 最終話（前書き）

先に謝らせてもらいます。

ごめんなさい

いきなり最終話の理由はあとがきで

## 最終話

ピカーン！

突然俺に秘められた力が解放される。

俺「何だ？この湧き上がる力は！？」

ゴゴゴゴゴゴゴ（湧き上がる力の音）

俺「これなら、いける！食らえっ必殺ツスターマンスラッシュュ！！」

ズバツ！！（大狂猿が真つ二つになる音）

大狂猿「UGYAAAAAAA！！」

バタツ

俺「勝ったな…そうだ、パンダナ達は、竹中はどうなった！」

竹中「オオーイ！！」

俺「竹中！無事だったのか！」

竹中「ああ、パンダナさん達に助けてもらったよ」

パンダナ「竜神ごとき拙者の敵では無いナリよ！」

俺「さっすがパンダナだな」

全員「アハハハ」

こうして

天刺山の決戦は終わりを告げた

.....

〈狭間の話〉

赤い羽の姉「飽きたわね」

赤い羽の弟「飽きたね」

「.....元にもとに戻しましょう」

「そうしよう」

赤い羽の母親「ご飯できたわよ。早くきなさい」

「はい」

.....

アナウンス「次は天王寺天王寺」

俺「……ハッ、ここは、、電車の中か？……！？まさか戻ってきたのか！」

電車の中を見渡す。

竹中、パンダナ、鏡、ツイン、金村さん。一緒に異世界に跳んだ人間全員いる。

窓の外を見る。

懐かしい街並みだ。

帰って…きたんだな。

…もうこの世界（現実）は嫌だ。

確かにそう思った思いもある。

しかしこの胸に広がる安堵感も嘘ではない。

ブルルルル　ブルルル

捨てたはずの携帯がなっていた。

メールを受信してみたんだ。

川野からだった。

全員無事大学に戻れたそう。良かった。

「ん、ん？ここは、、」

どうやらみんな気がつきだしたようだ。

さてと……

俺「ようお前ら！日本橋に遊びに行こうぜ！」

E  
N  
D

## ■最終話（後書き）

もう一度謝ります。

ごめんなさい

いきなり最終話の理由は

この作品に（仮名で）登場している友人にバレました。

何勝手に書いているんだとお叱りをうけてまして……

今までの分は仕方ないにしろこれ以上はダメだと言われたのでこんな終わり方になりました。

8月30日17時50分現在、総合PV8339アクセス

これまで読んでくださった方  
本当にありがとうございます。

良ければ「アフターヒーロー」も観てやって下さい

それでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3993t/>

---

電車で異世界物語

2011年8月31日12時14分発行